

會



報

1957年12月

195

日本山岳會

A・C百年祭

成瀬 岩雄

ものの本の伝えるところによればアルパイン・クラブ創立の発案者の一人たる Edward Shirley Kennedy はいつのいつか。

一八五七年夏の事。Guttenen の宿の水は洗面にもこと欠く程少なく、Hasli Thal の流れの曲りくねった清流の淀みで朝の洗顔を済ませたところ、偶然にもまたここに洗顔に現われた二人の登山家、William Mathews とその息 St John Mathews に邂逅、共にその奇遇を喜びながらかねてから懸案のアルパイン・クラブ創立について語り合ったのがそもその初めであつたという。

この年の十一月六日、バーミンガム近郊のマツシュース家においてその一家とケネディーが晩餐を共にし、かねて心当りの、目星しい友人連の勧誘状や、会則の案文を作つたりした。会則七二条に「一万三千呎以上の山に登つた者でなければ……」というのが入会資格の一つとなつたので——當時は一万三千呎をチョット出たブライト・ホルンに登る者が急に増えて来た等という面白い話もある。年会費と入会費をそれぞれ一ギニー宛取つて一体何に使うのだ、それにクラブルームを持つたり、管理人まで置いたりするなんて、そういった式のことをやつて、どうする積りなのか、リビン

グストンとかその他知名の探検家を招んで話を聞こうなんて、どういう了見だろう、そんな輩をわれわれのクラブに招くことは折角のわれわれの純なる気分を汚すようなものじゃないかわれわれの要するに一つの Gathering であつて、そんな Society なんて大げさなものじゃないのだから、年二回の晩餐会の会費もロンドンに住んでる連中は未だしも、他の連中は往復の汽車だつて掛る、金のある奴だけの集りになつてしまふのは好ましくない等と頑固な神父さんの Hort という人に創立発案者が警告されているかと思うと、事實、貧家に生れ、八才にして両親を失ひ、石工さんの職人として刻苦勉勵、後世建築家として一躍其の道に名を成し、セントピータスブルグ記念碑のデザインに堂々入賞、ロシア皇帝より最高の勲章を授かり、その寵愛を得て、滞露六年、シベリヤ、ダツタン、中央亞細亞の各地を旅して帰つた変わり種の会員も初期にはあつたそうだが、或る晩餐会では出席者の一人が「ついでこのあいだ、ワシントンに行つたら、アメリカ政府の役人からアルプスの山の上で会合するイギリス人のクラブが出来たそうだが本当かと聞かれたので私はイギリス人の信用を維持しようと思ふのあまり『お前のいう通り、そりや、本当だ』と答えて置いた」といつて喝采を博したこともあつたという、ある少数の連中は、左には黒服をまといつたウェスターを、右には緑の服をまといつたガイドを、その直中には黒と青の桶を浮出したし、その下に「Cure per

Alps」と書いた便箋や葉書を作つてお互いの通信に使用し、要するにこれとても、食うことと登ることに考えていないわれわれの仲間を羨望した絵葉書なのだと、喜んでいたグループもあつたというのだから、百年前頃のアルパイン・クラブは如何にも「天下泰平」だつたようだ。

マッシュス家は一名、The Leasowes ともいわれ、要するに日本でいえば吟風荘とか松籟荘といつたようなものだろうけれど、今なおこの地は陸地測量部、二十五万分の一地図にアルパイン・クラブ発祥の由緒ある地として判然、記載されてあるという。岡上の森に囲まれ、前庭には羊群の遊ぶ広場、それこそ Fox Hunting であり、そのような吟風荘の写真こそは本当に見るからに山の話でもしていだらキリがないと思ふすような写真だ。

エヴェレストが初登頂された時、

「百二十三才の父に、九十七才の母、いや、九十七才の父に百二十三才の母か。どつちでもいいが、結婚生活三十二年にしてここが漸く子供達をもうけることが出来た。養ひ、おし着せ、お小遣まで与え、その上、呼吸する道具まで貰つて、やつと地上最高と覚しき地点に立たせることが出来た……」

探検(地学協会のこと)と登山(アルパイン・クラブのこと)という各々の特長が終始手を握り合つてここに偉大な成果を得たことは誠に慶ばしい……」

と當時の地学協会の年次晩餐会の席上でアルパイン・クラブ会長の

は慶びを述べたがエヴェレストの登頂はその何れもが百才の長老たる地学協会とアルパイン・クラブのジョイント・コミッティに育まれて来たことは衆知ながら、エヴェレスト登頂も確かに世紀の偉業には違いないが、この演説も正に、三年後に百年祭を祝う、アルパイン・クラブには誠にふさわしい演説だつた。

今度の百年祭のためにハント隊長がアルパイン・クラブの会長に選ばれたが、従来の標準年令からいえば、初期の頃は別として、前例ない若い会長とはいへ、百年という光輝ある歴史を祝うためには「エヴェレストのハント」で「本当によかつた」といいたくなるのも敢えて私一人ではないだろう。

百年祭に模、松方両氏出席

本年十一月六日ロンドンのドルチェンスタール・ホテルで開かれたアルパイン・クラブ百年祭に、本会から模、松方両氏が出席した。当日は世界各国、約二十カ国山岳会の招待者を交え約四百名が出席し盛大なお祝が行われた。

模氏は、毎日新聞と映配社の好意による「マナスルに立つ」の十六ミリ、英語版を携行し至る所で好評を博した。松方三郎氏より成瀬宛「模さんもフィルムも百パーセント値打を發揮している。ロンドンではなかなか報告すべき収穫が多かつたが、話し出したらキリがないから帰つてからにしよう」と通信がもつた。なお模氏はロンドンからの帰途スイスに立寄り十一月二十四日無事帰国した。

今年の国体登山部門は一時取り止めに、なかり、いづいぶん気をもまれたり、いろいろの困難を乗り越え、南アルプス南部の山岳を舞台として実行されることになり、山岳会支部と県岳連との関係もこれを機会にスッキリしたのはおめでたいことであつた。これに漕ぎつけるまで地元岳人諸氏の私おれたなみなみならぬ努力に敬意を表する次第である。

今年は別宮会長が公用のため差支があつて、開会式と閉会式だけ

ダージリン③

—ヒマラヤの展望台—

三田 幸夫

テンジンを訪問

オヴザ・ヴェートリー・ヒルから下りてダージリンの街中へ入ると、そこにはもう朝の輝かしい空気が溢れていて、早起きの人達のがんびりと散歩しているのに出合う。しかし本通りの店屋は未だ表戸を閉めたままひっそりとしてゐる。ただ、下に見えるいつも賑やかなホバザールには、早くも美しい色彩の服装の色々な種族の人達がごたごたと集まつてゐる。朝の買出しなのだろう。

教会が何の時間を知らせるのか盛んにビッグ・ベンの鐘を鳴らしている。その教会の並びに瀟洒な破風造りの屋根を持つ建物が眼に入る。見るるルビー・ホールという古い看板がかかつてゐる。それで思い出したのだが、かつて何

は無理をして出て下さつたが、その他は私が代理してずつと本部と行動を共にした。登山路も諸施設もまだ充分整つていないこの地方

国体参加随想

日高信六郎

で六コースを出すというのは相当思切つたことで、いろいろの心配もしたが、静岡県岳連諸君のお骨折りと地元町村当局および住民の心

度か滞在したことのある家である。その頃英国の隠退官吏が経営していた下宿屋で、私にとつては、宿賃の安いのと、親切な老夫婦に惹かれて定宿にしていたのだ。なつかしかつたが、その老夫婦も勿論もう生きてゐるはずがない。今は印度政府の外人登録所という大きな新しい看板が門柱にかけられていて、その傍らには何故か、銃を持つた番兵が眠たげに立つてゐた。

マウント・エヴェレスト・ホテルの近くまで行つた時、四十年前配のかつぶくの好い米国人らしい宣教師に声をかけられた。「この辺りにダライラマの兄さんというのが住んでゐると聞いたのだが、御存知ないだろうか？」とのことだつた。「私は昨日ここへ着いた許りで知らないが、若しトウブテン氏がこのなら私も東京で面識があるが、米国に行つてゐると思つてゐたのだが」というと、「いや最近こつちへ来てゐるはずで何とか会いたいのぞ」という返事で、何か妙に気を惹かれる思いだつた。

からなる協力により、危ぶまれた天気もどうやら最終日まで持ちこたえたためであつて極めて工合よく終了したのはありがたかつた。

登山は大井川と安倍川を囲む山と峠の間に展開されたのだが、大井川の谷は井川ダムの完成を契機としていま大変貌のさなかにある。新しく出来た湖水も、出来かけのバス道路も、みな水に追われて上手に移つた家やお墓や学校やお寺も、まだおちつかない感じで、そこに住む老若の人たち

——共に居所をつきとめれば不思議な邂逅で面白い話もあるだろうと思つたが、テンジンとの約束の時間も迫つてゐるので、解つたらお互に連絡しようといつて別れた。結局邂逅の機会はなかつたが。

テンジンの家はホテルから五分と歩かぬ近さだつた。往來に面し、ダージリンによく見かける二階建の別荘風の建物だ。前面の壁には、ペンキ屋でも描いたと思われる、極彩色のエヴェレストの登路図、それにビッケルやネパールのインドの国旗が組合わされた記念の絵といつたもので描かれてゐた。門には、犬がゐるから気をつけてくれと英語で注意書があつた。

犬の吠えたりする声聞きながら刺を通じると例の写真で度々見る肥つたテンジン夫人が出てきて応接間へ通される。仲々立派な家具調度の整つた部屋で、壁間にはテンジンや、ヒマラヤの写真が一杯かかつてゐる。やがて白のスエー

にも新しい生活が板につかぬさまが見える。しかし今度の国体のおかげで土地の人たちの眼があらためてまわりの山と谷に向けられ山(ことに安倍川を囲む山々)のみちや施設が整えられてはかでは見られないいろいろな特徴を今日まで保つてゐながら世間からうとんじられていた南アルプス南部の山と谷が全国の岳人に親しまれることになつたのはよろこばしい。

ター、グレイのパンツ姿のテンジンが入つてきて手を握り合う。前から思つてゐたことだが、南極に残つてゐる西堀君をしのばせる仲々の男前で、極めて愛想が好い。私がダージリン茶が好きだと聞いて、おかみさんと一共になつてお茶を入れたり、ビスケット類を奨めたり到れり尽せりの接待振りで、流石に英国人達に永年仕込まれただけのことが解る。

テンジンが一寸坐を外すとおかみさんが犬の自慢話を始める。チベット種のチンコロに似た犬を甘五匹も飼つていて、その中の一匹はカルカッタのドッグショウで一等だつたとのこと、その写真が載つてゐる雑誌を幾冊か見せて甚だ得意である。おかみさんにとつては、英国を訪問した時、色々な人達に会つて歓迎された話より、この犬の話の方が自慢らしく見える。

おかみさんの英語は甚だたどたどしいのでいつの間にかヒンドスタンニーで話し始める。と、そこへテンジンが戻つてきて「なんだあ

なたはヒンディが解るのか」と、今度は三人で英語とヒンドスタンニーとチャンボンの会話が賑やかに続く。

私にとつてテンジンとの対面は始めてであつたが、その名は勿論前から知つてゐた。しかしその名前を強く胸に刻みこまれたのはエドモント登頂のときのことである。あの時の強烈な印象は今日もなお生々しく心の底に再燃させる事が出来る。

六月一日、登頂の栄冠は逸した、七五〇米まで到達した加藤、山田、石坂の三隊員の内、加藤、山田の二君が、その翌日第七キャンプから一挙にベースキャンプに馳せ下りてきた。私としては、当時の悪条件下にプラトリーに達することさえ仲々難しいだろうと思つてゐた矢先だけに、その模様を報告する二人の元気な姿を見て嬉しさに胸をしめつけられるような激情がこみ上げてくるのをどうしようもなかつた。

その夜、私は二人を中心にどうしたマナスルへ登れるだろうかと次の作戦計画を既に熱心に検討し始めてゐた。その時のことである。後者の天幕から通訳のサガルが飛び込んできて、エヴェレストが登られた。カトマンズ放送だと、興奮して怒鳴つてゐる。数日前のカトマンズ放送は、英国隊がエヴェレストを失敗して撤退を始めたことと報じてゐるのを私もサガルも聞いてゐるので、間違ひではないかと一瞬いぶかつた。しかし、サガルは落付きを取戻して後を続けた。登頂は五月二十九日、登頂者は二人で、一人はテンジン。

一同はしゅんとして、異常な沈黙が続いた。しかし第二報が詳しく登頂を確認し、もう一人の登頂者はヒラリーということがわかった。

それから四年を経た今日、私はそのテンジンと彼の家で世間話に余念がないのだ。しかし今のテンジンは、世界の英雄であり、立派な家に住み、シエルパ階級の夢想だにしなければならぬ税金の悩み、山の話になれば本来のシエルパの姿に立ち還る。彼も私達日本人のことについては仲間達を通してよく知っているだけに御互に初対面といった感じは全然なく、何年も前からの旧知のような親しき感じになごやかなふんいであつた。

山の話になると、流石に彼の顔色も何がしか生き生きとしてくる。私が永年興味を抱いていたジャヌー(七七・一〇米)とパンディム(六六・六九)について話合つた。パンディムなら小人数な登山である。矢張り未だ登られていない。手近かなところに残された宝物だ。テンジンの話では仲々手剛いがやれないこともないだろうとのこと。しかし裏側にはシキムの政府が宗教上の理由からやましの、矢張りやるとすれば西北の鞍部のグイチャラからということになる。ここまでは何人かもう登つた記録がある。問題はそれから上だが仲々面白そう。パルトロのムスタークタワーやアンナブルナのマチャブチャリに何となら感じが似ている。何としても

垂涎ものだ。

こんな話に夢中になつてゐる所へギャルツェンとパンジがやつてきた。テンジンから使の知らせで飛んできたとのこと。ギャルツェンはマナスルの第一回登頂者、パンジは五年の時、私と一番長く起居を共にした仲間。ギャルツェンは去年の暮東京で会つた許りだが、パンジには四年振りのが、しかし、ついでこの間振れた許りのような気がする。肩を抱き合つて喜んだ。二人共米国の雪男探検隊に雇われて二、三日中にネパールへ出かけるという準備の忙がしいさ中の時間を割いてきたのだという。その内、後から後から若いシエルパ達が集まつてきて部屋が一杯になつてしまつた。五年の時一諸だつたグンティやニマ・テンジンの顔も見える。二、三の者は日本山岳会のバッジをつけて甚だ得意気である。日本隊から貰つた靴をはいているものもある。

この連中の賑やかな嬉しいざわめきの中で話の中心はギャルツェンの日本からの土産話である。奈良や京都のお寺の話、三越に入ります人間の数はダーシリン中の人間より多いとか、一番皆が面白がるのはエスカレーターの話で、階段が下から上つてきて上でどういう風に消えてゆくとか、こんな話をシエルパ達は何度も聞かされてもうだろが子供のようになつて少しか飽きてしまつた。そしてギャルツェンは私に「ねえそうでしょう」といつて合槌を打つて貰うのが甚だ嬉しいらしい。

それにギャルツェンが羽田空港へ着いた時のニュース映画がダーシリンへも来たので大変な騒ぎだつたらしい。シエルパ達は毎日その映画館へ押しかけて喚声をあげたということだ。

その内に町の写真屋がやつてきて記念撮影ということになり、皆がやがやとテラスに出て顔を揃えた。テンジンはキャンオンをパチパチやる。ギャルツェンの東京土産をせしめたということだ。テンジンも今は一介のシエルパというより立派な家の主人でありスマートな紳士風だが、仲間のシエルパ達と一共にいればその立居振舞は矢張りシエルパの粗朴さ丸出しで甚だ好感が持てる。

私がハミリシネカメラを皆の方に向けてゐるとギャルツェンがやつて来て、私が撮すからバラサーブは皆の中へ入れという。腕前はマナスル登頂の時、依田サーブに教わつて試験済みだと大した自信振りである。そんな騒ぎの中へ米国の雪男探検隊員の一人が訪ねて来た。

丁度良いから共に写真に入らないかと奨めたが遠慮して入らない。そこで雪男発見の見込みは如何ですと月並な質問をする、いや、われわれは単に動物の調査が目的なんですと気まづ悪気な話題を外らされてしまつた。そして暫く立話をしてから、出発準備でとても忙がしいのでと逃げるように帰つていった。

雪男のミイラ

雪男に関しては一九五四年のイザート達による探検以来暫く噂も

と絶えていたが、今年に入つて前記米国の新聞が書き添へたためこのニュースは世界各国にも相当広くばら撒かれたらしい。どういふ人物か知らないが、米国の石油王トム・スリックという人の編成になる探検隊で、必要とあればヘリコプターも使うと報道されていた。テンジンは雪男の存在を肯定も否定もしないようだつた。この隊に参加するギャルツェンとパンジは、にやにや笑ひながらどうも発見は難しかろうと囁いた。

所が、その頃から一月近くも前、ネパールのカトマンズでイエティ(雪男のこと)のミイラが発見されたという記事が新聞に現われて評判になつた。それに依ると話はこうである。

或る日、町中で二人の外国人(一人は米国人)が或るネパール人から、イエティのミイラを売りたい男がいるが、買いたいなら日時を決めてカトマンズで見ることが出来るというニュースを聞いた。そのニュースをキャッチした一人の新聞記者が、早速その死体を売るといふ男に連絡がついた。

噂に依ると、圧縮されたその身体は北部ネパールのランブという土地から山の男が運んできたもので、長さ、九呎程で両脚と片腕が欠けているが、人間そっくりだと言ふ。記者はすつかり好奇心をかきたてて、翌朝約束の十一時に売手の家を訪れた。

そこで記者は細長い漆塗りの箱を見せられた。蓋が開けられ中身が現われた。それは縮まつた人間

の顔を持つた八呎程の壊れたミイラであつた。一本の長い腕は手頭まで完全に片方は肩から下が失くなつており、両脚は大腿部から切られていた。毛髪の痕跡はなく、顔は原始的なアフリカ土人の彫のようで、鼻が拡がり、唇は突出し、眼は自然のままのようにはつきりしていた。ミイラのそれ以上の検査は売手の女房に拒絶され、死体は砂糖袋に戻され蓋をされてしまつた。

話はこれでお終いだが、このミイラ取引の商談が成立したかどうかは知らない。インド駐在の各国新聞社の記者連の中にも大変な特種と少々色めきたつた人もあるらしいが、結局眉唾ものという結論になつたようだ。兎に角ネパールという国では、未だに突拍子もない妙な不思議な話を往々聞かされる。雪男は、依然として謎のまま現在の直否については確たる証拠のないまま、結論は下されてないわけだが、ネパールやチベットに今もつてそんな正体も判らぬ生物がいるかも知れないというのも一面嬉しい話のようにも考えられる。先年ネパールの外務大臣一行が東京に来た時、一夕会食の機を得たが、その中の高官の一人は直面目に雪男の存在を信じているような話を私に洩らしていた。そしてカトマンズの相当の知識階層の中でも、雪男が多分熊か猿のことだろうと簡単に片付けられてしまつたことについては大分不満らしいことを最近になつて聞いた。古い伝説がそのまま残されてゆくことへの未練かも知れない。私達にとつてもヒマラヤの氷河や、高い峠の

天幕の中で、シェルパが真剣な顔で語る雪男の話は、仲々神秘的で、大人達から天狗や河童の話等を聞かされた稚い頃のことを思い出す。

先日、インドのニューデリーに長く滞在中の知人からの便りで、同宿の誼しめで懇意になつたアイランド人が雪男のことを執筆中だと知らせた。ブラインズという人だとのことだから、それからあの米軍隊の隊員の一人だから、その内今年の雪男探検の報告が発表されることだろう。どんな成果があつたのか楽しみにしている。

ギャルツェンの家

記念撮影を済ませた私達は打ち連れて街中へ散歩に出た。カンチの山群には大分雲が多くなつてきているがパンディムやナーシンの雪峯が町の丘の杉林の上に頭を見せている。誠に美しい静かなヒマラヤの風景である。

シェルパ達は私を中心に大声で笑い、冗談を飛ばせながらぞろぞろと歩く。町の人々が見慣れぬ私と顔なじみのシェルパ達を見較べいて私達はテンジン・ノルゲー・ロードの入口に来た。ここから深い谷に面した急な傾斜地に小さな家が点々と建っている。シェルパ達の部落なのである。ここへ入る路が、テンジンのエヴェレスト登頂の名譽を記念してテンジン・ノルゲー・ロードと現在命名されている。

シェルパ達はさよならを繰返し一人減り二人減り段々に散つていった。明朝はまた天幕を畳んで一

共にキャラバンを続けるといつたあの長い旅の一日のような気持ちだ。やがて私はギャルツェン・ビルディングという小さな二階建ての家へ案内された。黄色と白の模様の壁に千九百三十九年建立と記されていた。ギャルツェン一族の所有とかで、当のギャルツェンは階下を占領している。と、いつても十二畳位の部屋で片隅にベッドが置かれ、調度は椅子卓子といった質素なものだ。谷を見下ろす窓の下にはソファがあり、その端の仏壇にはお米や団子、揚げた菓子、果物等が沢山供えてあつた。数日前からの御祭り続きで、毎日御客を互に招待し合う習慣で、その日はギャルツェンの家でも御客をするのだといつていた。

娘は学校へ行つていて留守だったが、東京へ来たおかみさんと男の子は頗る元気だつた。口はまだきけないが、よちよち歩きで人見知りもせず仲々可愛い。

部屋には最後までついてきたグンディと、新しく訪ねてきたギャルツェン・ミツチェンと私それにこの家の主人公だけになった。ギャルツェン・ミツチェンは三回に亘つて日本隊のサード（シェルパ頭）を務めた男で、シェルパの中でもヴェチランの一人として立派な登山歴の所有者である。おとなし過ぎるくらいはあるが私にとつて最も愛すべきシェルパの一人である。今はシェルパ登山学校の教師として若い連中の教育に挺身している。グンディは依然として口数の少ない生真面目そのまの男だが、彼のマナスルで示した強さは定評のある所で、今後シ

エルパの中堅層の中で最も光つた存在の一人になるだろう。模さん専属のルパに選ばれたのも當を得たことと思う。

仏壇の御供えものを肴にして、おかみさんのサービスするジャン（どぶろくの一）で酒盛りが始まった。人数が減つた故か、冗談も余り飛ばなくなり話が山仲間のことになる。ギャルツェン・ノルブが懐から大切そうにとり出した二通の手紙を私に示した。見ると、マカルーに初登頂したフラン隊の隊長ジーン・フランコからの手紙で、この秋、ジャンヌをやる計画が出来上つたから是非参加して貰いたいという意味で、ギャルツェンからの返事がないのでその催促が附け加えてあつた。

ジャンヌは私の最も関心を抱き続けていた山の一つである。遅かれ早かれ当然観られるべき運命にあつたのだ。フラン隊なら必ず見事な登山をやることだろう。ギャルツェンには是非参加し給えと奨めた。マナスルとマカルーの八千米峯二つに初登頂の榮譽を持つギャルツェンにとつてまた好機が訪れたのだ。

ギャルツェンは例のシェルパ特有の無表情な顔で、私も今どうしようかと考えている所なのでうしと答えた。そして、日本はもう何処かやらないのですか？ 計画があるならば是非私を契約して下さい。他をなげうつても必ず参加させて貰いたいと附け加えた。

ジャンの酔いに四人は少し宛好い気味になつていつた。私は手洗を求め家の外に出た。カンチの一部は見えていたが、ジャンヌの

姿は雲にかくれて見えない。が、その怪奇な山貌を私は心の中にはつきりと見ていた。

その晩、今度は、ギャルツェン・ノルブとパンジがホテルへやつてきてまた話は尽きることなく続いた。たつた一日のダイジリンの話がこんな長いものになつてしまつた。が、未だ書き残した話は沢山ある。しかし約束の枚数も少々超過してきたので筆をおくことにする。そして今私は、ギャルツェンが参加しているであろうフラン隊のマカルーのニュースを一番楽しみに待つてゐる。

(一九五七・九・三〇)

第十二回国体報告

折井 健一

昨年の第十一回国民体育大会は会場の関係から残念なことが登山部門行事が実施されなかつた。ゆへに、今年度の静岡大会は全国から選抜されて集つた岳人の大きな期待をもつて十月二十六日から三十日まで南アルプスの一角を舞台として行われた。

これより先二十五日夜は、集合地清水市の宿泊所において、国体登山部門委員会並びにリーダー会議を開いて各種打合せを行った。

行動概要並びに編成

十月二十六日前日まで懸念された颱風も、跡型なく晴れ上り草薙競技場における大会開会式終了の午後一時三十分バスまたは汽車にて入山根拠地の井川、千頭に向つた。

A班（光岳）チーフL、石田久夫

サブL、八木公信、牧野 茂、島根県、岩手県、山口県、秋田

コース、千頭、千頭ダム、小根沢コース、千頭（宿泊）

柴沢小屋（宿泊）

百俣沢の頭、光小屋、光岳往復、光小屋附近（幕営）

柴沢小屋、小根沢、千頭（宿泊）

B班（大無間山）小無間山チーフL、津田康祐

サブL、土屋武雄、巻本健介、徳島県、富山県、新潟県、福岡

県、鳥取県、長野県コース、千頭、千頭ダム、大垂沢

小屋（宿泊）

三隅池（幕営）

大無間山、小無間山、田代、井川（宿泊）

C班（青蘆山）チーフL、羽賀正太郎

サブL、鈴木正平、荒田 稔、慶媛県、香川県、大分県、京都

府、福井県、岡山県コース、井川、田代、小河内、五

千尺小屋（宿泊）

青蘆山、池の平、沼平小屋（宿泊）

田代、井川、千頭

D班（茶臼岳）チーフL、村木庸益

サブL、井口 清、武藤 紀、高知県、宮城県、広島県、佐賀

県、熊本県、山形県コース、井川、田代、沼平小屋

（宿泊）

畑山、茶臼岳、仁田池（幕営）

沼平、田代、井川

E班（十枚山）梅ヶ岳、山伏岳チーフL、仲西政一郎

サブK、佐藤平一郎、望月計市

奈良県、兵庫県、栃木県、愛知

県、滋賀県、和歌山県、岐阜県

長崎県、福岡県、鹿児島県

（七頁につづく）

焰を消さないように

藤島 敏男

一九五七年も西欧諸国からのヒマラヤ遠征は一向下火になつた様子はみえない。

外電の報ずるところを拾つてみると、

○アンナプルナ第二峰を目指した英国隊(チャールズ・エヴァンズ、デニス・デヴィス等)は、四月二十六日六〇九六米の地点に達したが、第二峰は不成功に終つて、第四峰(七五二五米)に登頂した。

○ジュガル・ヒマールの七一〇一米峰に向つたヨークシャ・クラブの隊は隊長クロスレー・フォックス海軍大佐が二人のシエルパと雪崩のため遭難した。

○十一名の隊員からなる印度登山隊がナンダ・デヴィに向つた。

○英国隊(ロバート少佐、ノイス、ワイリー等)が六月二日ネパール・ヒマラのマチャプチャリ(六九九七米)に登頂した。

○マルクス・シュムツクをリーダーとする六人のオーストリア隊は、六月九日ブロード・ピーク(八〇五一米)の山頂を踏んだ。

その帰途、恐らく頂上攻撃の一人であつたと想像されるヘルマン・ブール(三十三才)は、六月二十七日カラコルムのチュクルシア峰を試登中墜落死した。

○中華全国総工会登山隊(隊長史占春)は六月十三日大雪山脈のミニヤ・ゴンカール(七五八七米)に登頂した。

このようになかなかの賑やかさ

であるしまた今年も、残りすくない八千米級未踏峯の一つが、その頂上を人類に明渡した。オーストリアは一九三五年ドイツとの連合隊によるナンガ・パルバット、五四年ジョー・オユー、五六年ガッシャールブムII峰、続いて今年のブロード・ピークと目ざましい活躍ぶりである。

今次大戦直後オーストリアの登山家ドルフ・ヨナスは「われわれオーストリアの登山家が当分ヒマラヤから統出しをくつてゐる事実を、悲観することなく、よく受取らなければならない。スイス人やイギリス人はすでに活動を再開している。しかしわれわれオーストリア人は、残念なことだが、ヒマラヤ登山に再びわれわれの實力を示すには、おそらく数年を待たねばなるまい。新しくオーストリア登山隊がインドに向つて船出する日、その日の来ることを私は一時も疑つたことがない。われわれオーストリアの果敢で活動的な若い登山家が心からその希望を抱くのも、遠い未来ではあるまい」と述べているという(深田久弥・ヒマラヤ登攀史・一八一頁)。

戦後西欧の諸国に立遅れながらも、ここ四、五年来オーストリア登山界のヒマラヤでの活動は、やはり古い伝統と、右に引用した言葉にその一端が窺われる闘志と情熱が、絶えずつづけているからであらう。

われわれの日本山岳会も一九五二年秋の調査隊以来、五年に亘るマナスル攻撃が昨年実を結んで、日本も十四座の八千米級の一つを手中に収めたことは、大きな喜び

であつた。ことに昨年の登頂が、どこにも破綻も危な気もないものであつたのは、まことに見事で、西欧諸国の遠征隊に比して、われわれまでも肩身のひろい思いさえするのである。

この「マナスル登頂」の快報が国内に与えた反響は凄まじいものがあつた。戦後盛んになつた登山者の激増、今夏などは恐らく「神武以来の登山者数」である。「山の本」の洪水は今年に入つて、いよいよ猛威を逞しくしている。

棋隊長の文化功労者は、山登りなどは殺つぶしの仕業ぐらゐに考へていた連中の眼を開かせたにちがいない。記念切手、記念タバコまではよかつたが、「マナスル」を屋号の喫茶店が出現するに至つては、やや行過ぎと思われた。あとは「マナスル正宗」でも現われたら、登山者間で愛飲されること疑いなしとの説も出たが、これは寡聞にしてその実現したことを知らない。

マナスル登頂のもたらした社会的反響は、このようなものであるが、「マナスル以後のJAC」では、どんな空気であろうか？ 五年掛りの成功は、大きな喜びであつたと同時に、ホッと一安心という気分が漂つたことも否めない。

しかし日本登山界のヒマラヤ遠征は、マナスル登頂で大団円というわけのものではない。国情からいつても毎年とはいかないまでも過去の経験の薄くないうちに、また遠征隊を送るべきであり、また送りたいと考えている人も少なくあるまい。

次回にヒマラヤに向ふとすれば目標は、どんな山を選んだらよからう。やはり八千米級か？ 七千米級の面白そうな山か？ 大遠征隊か小遠征隊か？ JAC主催のビック・アップした隊がよいか、一つの団体の計画があつた場合、JACがこれを後援するというような形式の可否。マナスル登頂が完全無碍なものであつたとしても、隊員、装備、食料その他の点で、次回には、かくすれば更らに一段と効果が上がるといふようなことがあれば、これらについての忌憚ない意見。ヒマラヤ遠征に対して、国内での登山では、どんなことに重点をおいて、経験を積んでおくべきか？ まだ問題はいくらでもあるだらう。

過去数次の遠征に参加した隊長隊員連から、毎号会報誌上に何かヒマラヤに関して稿を寄せられることが、JACの中にマナスル登頂までは、天をも焦がさんばかりに燃え上り、其後や下火になつたかの感があるヒマラヤ熱の焰をたとはそくとも永く燃えつづけさせるに役立つであらう。そして次の遠征を盛上らせるには、是非とも必要なことだとおもうのである。(一九五七・七・三〇)

(追記) この一文は去る七月末に認めたので、その後の海外登山界の動静を拾つて書き加える。

○ナンダ・デヴィへの印度登山隊は頂上直下五百五十米にまで迫つたが三日間の吹雪と、隊員一名病氣のため退却した。

○明一九五八年ダウラギリ(八一二七米)への試登がスイス隊に許可された。オーストリア、アルゼ

ンチン、米國と各國からの競願であつた。

○K・クズミンを隊長とする十名のソ連登山隊が九月六日ビック・スターリン(七四九米五)の第三登に成功。パミール高原に沿ひ北方からの新登路による。

○オーストリアは明年カラコルムのヒドン・ピーク(八〇六八米)に登山隊を送ることに決定。

ハント会長の挨拶

LONDON (AP) — Sir John Hunt, leader of the expedition which conquered Mt. Everest, says he believes man eventually will tackle the still higher mountains of the moon.

Some of the peaks on the earth's silvery satellite tower 40,000 feet compared with Everest's 29,000.

"One day we will be climbing them—special suits and all that," Hunt told a meeting of the London Alpine Club. "But it will be after my time. I'm afraid."

山岳五十一年発行

山岳五十一年が発行されました
主な内容は、マナスルの印象(横有恒)アルプスのタルタラン(日高信六郎)ネパールの紀行(成瀬岩雄)日本山岳会五十年史(沼井鉄太郎)関口泰氏の追悼、伊藤恩氏の思い出、会報その他です。会費未納者にはお送りしません。

三十年前の古 書目録から

小林 義正

「山と書物」の中でエドワードの古書目録のことについて触れたところ、古い目録に興味をもつ私にまた興味を感じられたものか、ある日藤島(敬男)さんが一束の目録を手にはわざと私の勧め先へ立寄られた。拝見すると、一九二六年から一九三七年頃にかけての書店の山岳関係図書目録で、その昔滞欧中に入手したのもあれば、帰国後郵送を受けたものもあるとのこと。大目録というものは当初こそ読書の関心と呼ぶが、あとあとで丹念に保存されることが多く、たいがいは散逸したり破棄され勝ちなのなのに、流石愛書家の藤島さんらしい心遣いが嬉しかった。殊にお宅は戦災で多年苦心の蔵書も焼失された筈なのにと思うと、手にした目録がひとしおいとした。

フランシス・エドワード書店の創立は一八五五年で、同業の Bernard Quaritch の一八四七年にこそ僅か及ばないが、百年以上も続く世界的に名の通った古本屋である。それから伺ったエドワードの地下室で棚に梯子をかけて、それこそ昼飯も忘れて古本を漁った憶い出のお話も愉しかった。そして最後に、この目録をある条件付で私に下ろすとのこと(その条件というのは後で述べる)恐らく

藤島さんが何度も繰返し目を通して思われる——その証拠には赤や青鉛筆でいろいろ書入れがしてある——目録をともかくお預りしたのだ。その夜遅くまで私がこの目録によつて愉しんだことはいうまでもない。

先ず、一番古い No. 482 (May 1926) を開くと、一八三八年発行の

Atkins, Henry M., -Ascent to the Summit of Mont Blanc, Aug. 1837. Privately printed, 1938 £1

が目にとまる。この書は当時市販されたものでなく、著者の伯父にあたる J.C. Children の編集にかかるとある。私もおかねが欲しいと希う本の一つ。最近海外の目録で見付け、近く入手出来る見通がいたが、当時から稀本らしく very rare と附記されている。

Broekdon, W., -Illustrations of the Passes of the Alps. 2 vols. 1928

には Large paper copy と Ordinary paper の二種があるが、値段も一方の四倍一〇倍に達し、他方の一磅と大分開きがある。

サー・マーチン・コンウェイの著書は六冊まで載っている。しかも各冊一〇志内外となるのが懐しい。

Conway, W.M., -Climbing and Exploration in the Karakoram Himalaya. 1894 10s
do Maps and Scientific Reports to the Above. 1894 10s
do The Alps from End to End. 1895 8s

bo The Bolivian Andes. 1901 10s
do No Man's Land. 1906 15s
do The Alps. 1910 4s
J. チンダルや H. ウィンバーの著書はあまりにも有名、続く D.W. フレッシュフィールドの中で

Freshfield, D.W., -The Exploration of the Caucasus. 2 vols. 1896 £2 10s

が、やはり一番光っている。初期のコーカサス文献として著名であるが、別に一〇〇部の限定版もあつて、幸い私もその一つを最近手に入れることの出来た豪華本である。

初期のシェラ・ネヴァダ探検に名を留める C. キングの登山記には、一八七二年の初版が六志、一九〇三年の後版に四志という値段がついているのも夢のよう。初期の英国山岳会員たちの筆になる諸書もあらかた載っている。最近の傾向から云えば、これら初期のマルプス文獻はヒマラヤものに押され気味で、漁る人も割合少いようだが、やはり忘れてならぬ古典だけに私には愛着が深い。A. ウムアーのアルプス記は初版が私刊のためか、他に比べて高価のようである。

Coolidge, W.A.B., -Alpine Studies. 1912 6s
Dent, C., -Above the Snow Line. 1885 £1 10s
Mathews, C.E., -The Annals of Mont Blanc. 1898 10s 6d
Moore, A.W., -The Alps in 1864. Privately printed 1867

£3 Peaks, Passes and Glaciers. 3 vols. Ed. by J. Ball. 1859 £2 15s

Wills, A., -"The Eagle's Nest" in the Valley of Sixt. 1860 9s

アルプスの先駆者としてドウ・ソニールの名は不朽であり、その著書をアルプスの山々と切り離しては考えられない。一七八七年のモン・ブラン登攀に始まるその紀行には、四冊もの初版と、八冊から成る後版とがある。愛書家の多いわが国へも、確かに戦前舶載された筈だが、現存の危ぶまれる稀観書である。私も戦後一、二回目録で見掛け、直に発注したが、毎回入手出来ずにいる久恋の書物である。

Saussure, H.B. de, -Voyages dans les Alpes. 4 vols. 1779 £3 10s

一九二六年の目録と云えば、ラトレッジの第回エヴネレスト遠征もまだ行われていなかった年代であるが、何冊かのヒマラヤ本も掲載されている。前に記したコンウェイやフレッシュフィールドのほか、マンメリの「アルプス及びコーカサス登攀記」や二十世紀の初頭に当つて活躍したワークマン博士の著者がそれで、後者の第一著書が夫人との共著となつてゐることは衆知の通り。

Workman, F.B. and W.H. Workman, -In the Ice World of Himalaya. 1901 8s
" Ice-bound Heights of Mustang. 1908 10s
" An Exploration of the

Nun Kun Mountain Group and its Glaciers. (from "the Geographical Journal") 2s 6d

" First Exploration of the Hoh Lumba and Sosbon Glaciers. (from "Geographical Journal") 2s 6d

" Exploration of the Siachen or Rose Glaciers. Eastern Karakorum. (from Geo. J.) 2s 6d

次に一九二九年の目録に目を移すと、写真帖や版画が中心に目立つ。中でも

Lory, G.L. and M.G., -Voyage Pittoresque de Geneve a Milan par le Simplon. Paris 1811

は、一八一一年のバリー出版、水彩画らしい三十五枚の着色版を入れ、別冊キヌスト一冊を添えた豪華本だ。

Swiss Views and Costumes; A Collection of Upwards of Eighty Coloured Plates & etc. of Switzerland & etc.

は、一八二九年から四〇年頃にかけての出版と推定される数枚の原色版と銅版画入り、モロッコ装の六冊ものだが、値段の方も相当で、当時各冊七十磅とあつては、一寸近づき難い高嶺の花である。

次いで、ロングスタッフのガール遠征に同行の A.L. Mummu, A.L., -Himalaya. 1907. with maps. 2 vols. 1908 £1 10s

には誰れしも心惹かれるが、近年の目録には殆ど見掛けないう珍ら

いものぢや。

ハワード・フネリーの第一回エヴェレスト遠征に二〇〇部の限定版があるとかねて聞いていたが、まごうかたないその限定版が同じ目録に載っている。ハーフ・ペラム、函入りのLarge paper ed.には恐らく誰れしも咽喉から手が出る思いだが、三十年前の目録とあつては致し方もある。

Howard-Bury (Lt. Col. C.K.), Mount Everest: the Reconnaissance, 1921. Large paper ed. 1922 £410 s
やい、第三冊目の目録一九三一年に移ると

Audio, J., Narrative of an Ascent to the Summit of Mont Blanc on the 8th and 9th Aug. 1827. Large paper copy, 1828 £1

が目につく。アウルジョウのモン・ブラン登攀記は一八二八年の初版以来、再三版を重ねたが、ここには初版と再版とが並び、しかも前者はLarge paper copyであるのが魅力。当節の出版には殆ど見掛けないが、大判の古い書物には重量感がある上、本文組方にもゆとりした味を持たせた Large paper ed. は心から懐かしいものである。

次に、ド・ウ・ンシエールの Voyage dans les Alpes がまたしても目につくが、これは三十年の目録だと自分自身にいい聞かせ

著
Schlagintweit (Herman Adolphe, and Robert de), Res-

ults of a Scientific Mission to India and High Asia, 1854-58, 4 vols. 1861-64 £14

も載っている。先日松方さんが千金を投じてでも欲しい本と云つておられたが、いま内地に現存するかどうか。戦後は外国の古書目録でもついぞ見掛けたことがない。

また、思わぬ本に特装本のあるのを知ったり、私刊での刊出を教えらるるのも古い目録漁りの功德の一つと云えようか。汚みの出た古書目録の頁を繰り、細かい活字を丹念に拾つてゆくうちに Speciated, とか、Ex-library, Privately printed などの文字を捜しあつて楽しみも本好きならでは味わえる境地である。

試みて一九三一年度の目録から、この種のを拾ひ出して見

Barry, M., Ascent to the Summit of Mont Blanc, 16th to 18th Sept 1834. Privately printed 1835 15s

Bulwer, J.R., Extracts from my Journal, 1852. Privately printed 1853 15s

Carr, H.R.C., The Mountain Snowdonia: History, Science, Literature and Sports. Ex-library 1925 10s

Cloves, G., Forty-six Days in Switzerland and the North of Italy. Privately printed 1854 15s

Filippi (Fillipo de), The Ascent of Mount St. Elias (Alaska) Special ed. on large paper, 1900 £14s
Longman, W., Journal of Six

Weeks, Adventures in Switzerland, Piedmont, and on the Italian Lakes, June to Aug. 1856. Privately printed 1856 £1

「Lecture on Switzerland. Privately printed 1857 4s
など七点余りが数えられるが、初期の山岳書の出版形式を知る上の参考となる。

一九三二年以降数年間は、エドワードの目録が何故従来の形式を止めて一枚刷の印刷や数枚綴りのタイプリストに変えたのかについて、私は知るところがない。また一九二六年において第四八二号を数え、一九五七年に第七七六号まで送り出したこの老舗の歴史にも、調べればいろいろ興味深いものがありそうだが、未だ手を染めていない。

一九三三年から三六年頃へかけての目録には、アルパイン・ジャーナル誌全揃の広告をしばしば見受けるが、一九三六年二月附のそれには、ダグラス・フレッシュフィールドの署名と鉛筆の書入れがある同氏旧蔵品というの載っている。この珍本はもちろん藤島さんの注目をも惹いたらしく、署名云々といふところに赤丸とアンダー・ラインが施してある。その他にもいろいろ有名古典の所収が多く、一々書名を挙げて懐しんでいたのは際限ないので、最後にい

ま一つだけわれわれに馴染深い本を紹介しておく。

それは一九一八年にウェストンが著した
Weston, W., -Playground of Far East. 1918

で、発行価格十八志のところ三志六片で提供する旨のスペシャルオファーがある。「若し英国人がスウイスを欧州のブレイ・グラウンドのホームランドとするならば、ミスター・ウェストンはまさに日本をそのように見ていた。富士と甲州の巨峰―南アルプス―にも三章を割き、その他の章で北アルプスについて述べている」という本屋の説明文も微笑ましい。

さて最後に、この文の冒頭に私は藤島さんからこれらの目録をある条件付で譲られたと誌したが、その条件というのは本好きが貴重な先人の遺産である古典をなるべく多くの山登りをする人たちに親しませたいという心遣いから、この目録を中心に私に何か雑文を書くようにとのお話があり、それとなければあげないと云われたことだ。実は目録は欲しいが、条件には閉口したが、ともかくお預りした結果がこの蕪雑な一文となつた次第である。読まれた方はさぞ迷惑だったかも知れないが、古書を偲ぶ上に何等かの役に立てば望外の幸である。

(一九五七・一〇・一五)

(四頁より)

コース 井川―岩崎―井川峠―関ノ沢 (宿泊)―十枚山―刈安峠―梅ヶ岳温泉 (宿泊)―新田大谷崩―山伏峠―小河内―井川 (宿泊)

F班 (大日高原―梅ヶ岳―八紘嶺) チーフ、沼倉寛二郎

サブ、松永長司、野田 賢、宮崎県、静岡県、大阪府、三重県、青森県、埼玉県、群馬県、茨城県、千葉県、神奈川県、山

梨県、東京都
コース、井川―岩崎―笹山―新田―梅ヶ岳温泉 (宿泊)―八紘嶺―大谷嶺―新田 (宿泊)―井川峠―岩崎―井川 (宿泊)

F班には別に役員団を一班編成して行動を共にしたが、富山支部長木津誠一、熊本支部長北田正三、全岳連副会長尾関 広、大会副委員長牧野衛、熊本熊治郎、石川支部龜田与三次の諸氏が参加された。

本部は、別宮会長、日高副会長、大会副会長尾崎忠次 (静岡岳連会長)、技術委員長小原勝郎、同副委員長星野 重、大会実行委員長山本朋三郎、同副委員長渡辺研造、川島礼一、総務委員長折井健一、自衛隊富士学校羽生、小林両二佐、其他委員等で編成し、井川、千頭を基地とした。

第五日目の十月三十日は、前夜からの雨も晴れ上り、午前九時に千頭駅前に参加者全員の集合を終り、本川根町大井中学校々庭において閉会式を挙行、地元関係者の挨拶の後、別宮会長、小原技術委員長及び各チーフリーダーの講評等があり、五日間にわたる大会も、地元の方々、五日間の援助と、天候にも恵まれて無事故の裡に終了した。

× × ×

第十二回国民体育大会登山の運営の成功は地元静岡岳連の尾崎会長の指導よろしきを得て、特に大会実行委員長を引受けた山本朋三郎君その他の方々の努力の結晶とも云うべきものであり、絶大な協力を惜しまれなかつた通信、救護、輸送に当られた関係官民諸氏に敬意を表したい。

最近の西藏書

多田 等 観

この地球上の中央に位しているチベットは、いまなお秘密の国とか、謎の国とかいわれ、一般の人々が深い興味を持つていただけに、その紹介は慎重な態度であつてほしい。従来行われている、たんなる興味本位の旅行記でもチベットのなりたちや、住んでいる人々の様子、宗教、風俗、日常の習慣などに誤つて伝えられている点が多い。

チベットを旅行する外人は、チベット人は舌をペロリ出す習慣をことのほかに誇張し、奇習として紹介されている。そして、わざわざ口を開き舌を出した写真をとるなどしてニュースを飾ろうとしている。

ソ連のヴェ・カツシスというジャーナリストが一昨年チベットを旅行した記録を著書として、「チベット横断記」を刊行（日本版はベースボール・マガジン社発行）した。そのなかにさまざまな旅行談が示されてあつた、勿論舌を出す習慣にもふれていた。これは、目上の人に対する一種の礼儀である」と説明し、極めてあたり前のことのように観察されておつたのは喜ばしく感じたのである。

チベット国は永い間封鎖しておつた国で、現代の文化とは交渉が遠ざかつておつたため、そこに発生した、さまざまな習慣がごとくとく奇怪なものに見えるのはやむを得ないことである。

しかしながら、如何なる場合にもこのような奇態な習慣をあばくような態度に出ることは、大いに慎むべきである。「チベット横断記」の著者ヴェ・カツシスはこの点に関して事実を忠実に描写しており、このようなジェントルマンとしての態度には大いに好感がもてた。なお同書の中には、中共政府が人民解放軍諸部隊に対し、彼等がチベットに入つていく際の心掛けを行軍覚書としてまとめたものが書かれていて、今後日本から、ヒマラヤやチベットを目指して山登りや地質学等の調査に出かける場合には参考になると思う。

今後の登山隊は今までのようであつてはいけないと思う。相手の習慣をよく知り、敬虔な態度で臨むべきである。以下参考までにこの覚書の抜き書きを記しておこう。

『寺院に入るとき、または、仏像の前に立つときは、メガネ、帽子をとり、靴を脱げ。寺院内ではけつして懐中電灯をつけてはならない。高僧または仏書を指すときは、ゆびを四本折るか、中指だけでさすようにすべきである。』

道で祈禱の車輪や神聖な文字の書かれた壁や峠の塚に出会えば、右まわりをしてさせるようにせよ。

チベット人の家の二階は——宗教的儀式を行うための部屋である。そこに泊つてはいけけない。決して老人の年令を尋ねてはいけけない。なぜなら、それは彼の死を望むことを意味するものだから。けつして御馳走を断つてはなら

ない。——チベット人にとつてそれ以上強い侮辱はないからである。婦人に向つて、あなたの夫は誰れか、と聞いてはいけけない。法定上の夫が数人いる場合がしばしばだからである。

チベット人が舌を出し、両手を前にさしたときには、笑つてはいけけない。これはもつとも高い敬意を表す挨拶なのである。若しもチベット人の家に泊るなら、先ず同家にラマ若しくは「活仏」がいるかいないかを聞いてみよう。もしもいるなら、階下の部屋を借りよ。

けつしてラマ僧の前に坐つてはならない。彼のうしろの席を占めよ。外套や帽子を仏像の前に置いてはならない。

けつして、こちらから老人に何も尋ねてはならない。話題を無理におしつけてはいけけない。

家に入つたなら、坐るようにならねば待て。主人の右側は主賓が坐る、左手に——つぎの客が坐るべきである。

物を喰べる時は、自分の鉢だけを用いて、他人のものをとつてはいけけない。若しもチベット人と一緒に食事をするならば、主人達がするように、自分の鉢をなめよ。

『活仏』のいるところでは、けつして煙草をのんではならない。彼自身がすすめる時まで待て。僧院ではけつして煙草をのんではいけけない。

ヤクのキャラバンをやとつたなら、それが一定の領域しか行かないことを覚えておくようにせよ。

若しもキャラバンの御者自身が隣りの領域に入ろうとしないのならば、それを無理に主張してはいけけない。

生きものは何も殺してはいけけない。湖で魚をとつてもいけけない。ここに記されているようなこと柄は大へん大切なことなのである。

近ごろ、チベット人の著書として「第三の眼」というチベット生活記の翻訳が読書界を賑わしている。同書の主題ともいふべき第三の眼の開眼について、このような手術法を用いることはチベットではかつて聞かない。ラマ教では、かかることは絶対になされてい

ない方法である。天眼通は、すべて観念的なものが先行するので、予言は単なる奇術的な行為によつてではなく、密教の奥儀を体得して高僧の体験からにじみ出るものである。そればかりでなく、書中に散見する神秘的な問題はすべてラマ教特有のものとして取扱つて

いるが、むしろインド教的な事象が多い。この著者はインド・ヨーガの方法などをラマ教の秘密部門のものとして叙述したのではないかと臆測される。

一般に広く知られていない秘密の国の事柄を、さまざまにこねまわして興味をそそるのは、チベットの誤つて解釈させるものであるから警戒すべきであらう。また、私が閱讀した同書中、イタリイの友人マラライニ君が苦心して撮つた写真を、何等ことわりなしに掲載しておつた。これは正しく版権侵害の咎を犯したばかりでなく、国道義にもとつた行為であつ

★図書紹介★

エヴェレストへの長い道

E・シブトン著

深田 久弥訳

シブトンといえば、ヒマラヤの文献に少しでも親しんだ者には記憶に残つている名前だし、エヴェレストとは切れない関係にあるヴェチラン。だから、『今日の成功に他の誰よりも貢献したエリック・シブトンのために乾杯した』と、エヴェレスト登頂記にハントが書いてあることにも、充分なことが出来る。そのシブトンの本が、まだ一冊も邦訳されてい

ないのは、むしろ不思議なくらいに思つていた折、最近深田氏の訳になる本書がもたらされたことは、喜びにたえない。

本書は登山の専門家のためというよりも、一般の人々にエヴェレストという世界最高峰が登頂されるまでのいきさつをわかり易く述べたものである。したがつて、分量もB6一〇〇版余頁という手頃のもので、それだけに細かいエピソードとか多少専門に亘ることは省略されているから、他書ですでにエヴェレスト登山の概要を知つて

いる読者には物足りないが、なめらかな訳文は一気に読み通させる魅力がある。

山川勇一郎氏の挿画は原書のものより遙かにすぐれているし、造本も気持ちのよい出来栄であるこ

て、出版者の良心を疑わざるを得ないのである。

とは嬉しい。末尾に第一回遠征以来の隊員名を訳者がつけているのも親切である。(望月達夫)
一九五七年十月五日 東京創元社発行 二八〇円

幸田露伴紀行文集

塩谷 賛編

露伴の枕頭山水(明治二十六年)が、明治紀行文芸の先駆であることは言うまでもない。同書に収められた紀行五編は、後に露伴叢書や、企業にも採録されたが、本書は更に希の二編(客舎雜筆、乗興記)を加えて上梓されたもので、若き日の露伴を偲ぶ興味深い本である。

露伴もとより登山家ではないが、収められた七編の紀行中から山岳に關した箇所を抄出すると、

醉興記(二十二年)では、赤城山麓、碓氷峠、和田峠、塩尻峠、木曾路の旅が述べられ、乗興記(二十三年)では、再び碓氷越、中山道、木曾路の旅が、地獄谷日記(二十三年)では赤城山での滞在が、易心後語(二十五年)では、東北、北陸、丹後、京大阪の長途の旅のうち、一の関で栗駒山を望み、厳美溪を賞し、盛岡から岩手登山を試み、田名部から恐山に登り、弘前から岩木山麓の嶽の湯を訪れたことなどが記されている。

後代の我々が一読して興味深いのは、醉興記、乗興記に記された中山道、木曾路のありさまと、易心後語における岩手登山の条とである。江戸の蜀山人、益軒の紀行以後、和田峠や木曾路の道中を述べた文人の紀行は、本紀行に至るまで途絶えているといつてよい。岩手登山の記載も珍らしい。当時なお盛んであつたらしい信仰登山の姿を、道者という職業案内者の賤しむべき言動とともに活写し得ている。明治の半ば、日本風景論より一年早く、ウェストンの日本アルプスよりも三年早く世に出た本書は、篇中いたるところに、

鳥水、花袋、桂月よりも遙かに以前の山河のたゞまいを我々に伝えている。

文章は奔放で、才気に溢れ、後の乙羽、麗水式の美文調でないのも良く、花鳥風月式の月並味嘆や感傷のないことも偉とするに足りる。戯作の気分があつて、諧謔を弄し洒落を好むところは江戸ッ子の面目であろう。自然に對し、些かも阿らず、懼れず、侮らぬ態度は若年にして大成を見たと言ふべきであろうか。(古沢 肇)

昭和三十三年五月十五日、新潮社発行、一五九頁、七十円。

立山黒部文献目録

富山県立図書館の司書瀨誠氏が多年渉獵採録された古今にわたる関係文献の目録を、今年全国図書館大会が富山県で開かれたのを機として、同図書館から刊行されたもの、A5版七四頁の冊子である(頒価一五〇円)。

雷鳥と鷹の羽とを描いた立山午王のカットを中央にあしらつたオリウ色の紙表紙、巻頭に立山縁起曼陀羅の写真版をのせ、本文に入ると、万葉集から江戸時代までの文献は立山黒部に一言半句ふれたものまでも集録するよう努め、江戸時代の文献は登山記、遠望記、詩歌物語小説、絵画曼陀羅、立山

開山及び信仰、歴史地誌伝説、博物誌、本尊志、鉾山志、災害の部門に分ち、明治以降のものは特にアルピニズム以前及びアルピニズム初期の文献は出来るかぎり採録し(単行文献は小冊子といへども集録)、山岳誌登山記案内記、芸術と文学、人文研究、自然研究に区分し、それに文書記録図類を加え、主なものには簡明な解説を付けてある。資料は同図書館及び編者所蔵のものを主とし、写本や珍籍が少くない。文書記録図類は、この方面に關する貴重な研究をたぐひ「山岳」誌上に発表される會員中島正文氏の古文庫珍藏のものが大部分を占めているほか、「山岳」の記事を豊富に紹介推賞してあるのはうれしい。

江戸時代の文献では、前号の会報に紹介した池大雅の三岳紀行(宝暦十一年一七六〇)の全文が、菅沼貞氏によつて美術研究七一年号(昭和三十三年一月)に発表されていることがわかる。その他大

淀三千風著日本行脚文集卷一(元禄三年一六九〇)所載立山山路往は本格的な立山登山記として最初のもの、佐藤秀昌著立山紀行(富山・寛政十一年一七九八)は江戸時代の和文立山登山記として代表的なもの、大塚敬策著立山記(弘化二年一八四五)(全文山嶽志に収録)は立山に關する恐らく最初の単行本で、江戸時代を通じ郷土で刊行された唯一の登山文献だろうと断じ、明治以降では浅池倫著立山権現(富山、明治三十六年)を明治になつて最初に刊行された単行本とし、小林復堂(もと富山藩出仕の漢学者、安政二年一昭和

四年)著復堂遺文(漢文、昭和五年)所載の立山(明治十一年)白馬(明治二十八年)白山、乗鞍、御岳、富士、日光白根の各登山記を紹介して先覚者の業績を推賞し、竹中邦香著越中遊覽誌(写本、明治十八二十一年頃)は明治初期の立山及び有峰に關する貴重な文献だとして、立山の声峯寺及び岩峯寺所在の古文書並びに黒部の奥山廻りや有峰に關する古文書記録は資料としても登山記としても貴重にして興味ふかく、加越能三州と立山黒部に關する古絵図の解説は山名の記載振りを示して面白い。

全体を通じ編者の良心的な努力の跡がうかがわれる。殊に登山家としての見地から集録解説されてあることが感じられて、われわれには大へん気がいい。これにより便益を受ける人が多かるべく、編者の労を多とするものである。(S・H)



会 員 通 信

秋の戸隠のぼり

日 高 信 六 郎

古来の名山(その多くは信仰登山の対象となつている)が近ごろ

閑却され勝ちなのを目をつけた訳でもないが、九月下旬の連休を静かな山あるきにと、ひとり戸隠に出かけて見たところ、結果はやはり期待に反しなかつた。信仰登山のほうは、戦前まで大ぜいあつた講中の参詣入山が戦後急激に減つてハイカーがこれに代り、沢山の宿坊はすつかり旅館化してタイルばりの便所や風呂場が出来ている。

中社では信濃支部ごひいきの高山館にとまり、奥社から順路を八方睨みにのぼつた。石鎚の頂上につづく岩嶺を想わせる表山の山稜をつたい一不動に下るまではなかなかの暇だつたが、それから五地蔵を経て高妻までの裏山はヒソソリとして、一不動で隣り合ひのテントを張つた高田高校の一隊をやりすごしたあとには誰もおらず、横なぐりの霧雨で眺望はかきもく駄目だつたが、黄葉紅葉が美しく織りなす間を縫つて、ナナカマドや篠竹をつかみ急坂を喘ぎながら秋山礼讃の賦をと念えた。

五地蔵には泊るによい平地があり、西側を少し下れば宝丹清水が湧いているが、むかしの小舎はあともなく、燃料になるような樹木はすつかり切られて残つていない。来年には県で一不動に軽石ブロックの小舎を建てることになつてゐるそうだ。ここには燃料もあり、水は牧場に下る途中の水清水を使う。高妻までのみは一応刈つてあり、来年は高妻から笹ヶ峰にぬける尾根の切り明けが出来るというし、八方睨みから西岳に登つて鬼無里に下る峰づたいのみは既に出来ているから、「縦走”

を試みるのも面白いだろう。

連嶺の西側にふかく切り込んで
いる裾花川の谷は密林に覆われ、
木曾殿アブキの洞窟までは通行で
きるし、高妻からも乙妻、合の峰と
峰づたいに下りてもそこに行ける
が、それから上流は崖がけわしく、
滝が二つあつて通行を阻むと云
う。魚沼三山の水無川の谷などと
同じく、谷好きの岳人に残された
秘境であるらしい。

中社でたのんだ徳武亥太郎は五
十を越した年配で、夜は焚火のそ
ばにゴロ寝して、あけがた雨がふ
り出してからやつとテントに入る
など、今どきには珍らしい昔かた
ぎのところがうれしかった。食料
自弁で五百円という案内料も安い
ほうだろう(中社に案内者が五人
いると云う)。なかなかの山好きと
見えて、現在奥社から登路がつい
ている弘法護摩所からさらに絶壁
を山稜まで試登することが出来た
から、来年までには鎖をつけた新
登路を開き度いと云つていた。出
来上つたら相当スリルに富んだ近
みちになるだろう。

下りは一不動に戻り牧場をぬ
け、暗くなつて中社に帰りつき、
翌朝バスで柏原に出たが、キャン
パーもハイカーも去りつくして、
静かな高原の初秋を楽しむことが
出来た。

仙丈、駒の泊り場

沼井鉄太郎

八月二十四日から五日間、孫の
園田恒裕(十才、小学四年)を連
れて戸台から入り、仙丈、駒を歩
いて来たが、夏山としては上の部

の天候であつた。

戸台入りの国鉄バスは小黒川出
合まで通じた。竹沢長衛氏宅泊。
家は中々景勝の地にある。但し主
人は昨年から高血圧のため病床に
起き伏し。さてこの附近で登山客
の泊る家は火の見の下にもある。
戸台川の河原歩きは相当暑く、
赤河原の合に出るまでやつと救われ
る。そのダムの上に丹溪山荘が
新設された。管理人は上島四朗氏、
本来の土地の人ではないが、美知
村観光協会や中部日本新聞社の通
信部の肩書もある。近い内に室も
増設する予定で、収容一〇〇人、
冬期適。小屋の位置は垂直的には
山頂に稍遠いが、仙丈、駒ともに
往復は十分可能であるし、鋸岳の
山稜や諸所の沢入りなども考える
と、放射状登山の根拠地として悪
くないだろう。

二日目泊つた藪沢小屋は清冷な
水の頗る豊富な所であつた。水洗
便所である。当夜は宿泊二十九
名、盛時は附近に天幕を張つて、
計五十名を収容したという。長衛
さんの長男が番をしていた。天幕
持参組は藪沢本沢に出た所に地均
らしたキャンブサイトに泊つて
いた。本沢に添うて登る路は、登
降容易な、頗る付きのルートであ
るが、天幕場も至る所にある。

その路を登つてゆく藪沢カ
ル底のモレーン丘の少し上に伊那
里村(市野瀬)の仙丈小屋がある
が、ここには寝具の貸出用意がな
い。しかしよい泊り場だ。今年は
若い人が番をしていた。

私達は登頂後、尾根路から藪沢
小屋に戻つて荷を整え、長衛北沢
小屋に下つた。小屋番の竹沢昭一

氏によれば、今夏は天候の加減で
利用者は予想外少かつたという。
そして序でに近頃の各所の山小屋
の番人が山そのものを知らないこ
とを慨嘆していた。竹沢氏親子と
も、武田先生や横さん等本会の功
労者の人々や登山の近代化初期に
活躍した慶応その他大学山岳部
の人達や個人登山家のことなどを話
していた。

四日目、仙水峠の頂は、水場に
遠いが、風雨吹雪の時を考えると
避難小屋の一つ位は欲しいもので
ある。それから駒津峰に登つて甲
斐駒頂上までは、水無しだが、至
る所に野宿の場所がある。それは
駒の東側路線でも同様で、今の世
の人々はどうしても小屋のそばば
かりでキャンブして、こういう岩の
ひさしの下などで夜の営みをして
大自然に溶けこもうとしないう
か、いささか不思議にさへ思う。

甲斐駒表道の七合目山の家には
この八月初旬から第二小屋が新設
され、飲料水は三百米先の山側か
らビニール管で引いてあつて炊事
だけには先ず潤沢であるし、スト
ープ、オンドルの施設もあり、眺
望もよいと、とにかく気に入って私
達はここで泊つた。位置は第一小
屋から高距離数十米下である。毛
布も新品で、快適な眠りにつくこ
とができた。地元白洲の菅原山岳
会の人々の御苦労の賜物である。

さて駒の新しい小屋でも、仙丈
の藪沢小屋でも、オンドル式暖房
設備があつたが、この様式の日本
の山小屋での探山はさして古いこ
とではないらしい。御承地の通り
オンドルは寒冷地朝鮮半島で発達
した特色ある暖房設備であるが、

山小屋に適用する際、床の緻密性
と目張りなど十分に熱の逃散
を防がないと効果はうすい。現地
で多分の研究改善を望むものであ
る。(一九五七・九・一)

仙丈の秋

藤島敏男

土曜の午後二時新宿発列車にの
るつもりで一時に駅へいったこ
ろ、一時五分発の列車がいる。駅
の歩廊で座込み戦術に出る気など
持たせないから、サツサと乗つて
すぐ発車。団体客の水増し占席を
整理して、らくらくと座つていつ
た。伊那北からのバスは夜十時す
ぎまであつて、その夜は高遠泊。
二日目早朝戸台直通のバスをつ
かまえて、八時まえには戸台着。
雨仕度をして細雨の中を歩く。戸
台川の兩岸、紅葉には少し早い
が秋草が咲き乱れて美しい。赤河
原とヤブ沢の合間に新らしくできた
大きな山小屋(丹溪山荘)で、ゆ
つくりと昼飯をすませて、八丁坂
へかかる頃か雨がぱらぱらなり
峠へかけての深い林は、ひとしお
風情をまじしたようだ。二時長衛小
屋着。

大正十五年十月柳沢の水石春吉
横内逸平の両人を伴つて、甲斐駒
から赤石までの途上ここに泊し
たのだが、長衛小屋は昭和五年の
建設ときけば、もつと小さな伐材
小屋があつたのだらう。三十年余
の歲月に記憶は夢のように淡くな
つた。

あくる日は、ひねもす雨ふりや
まず。こんな日は雨合羽の性能試
験というような目的でもないかぎ

り、山へ登るものじやない。トロ
トロ燃える火をながめて、炬燵閑
話にふけつていれば、一日ぐら
いなんの苦もなく過ごせる。

さて四日目十月一日、雲行き甚
だ有望。峠路から仙丈へ分かれる
道へ入ると、もうキラ／＼と朝の
光が輝きはじめた。駒も早川尾根
も北岳もみる／＼内に晴れる上る。
黒木に交じる黄葉紅葉、豪華なカ
ーペットを山一面にひろげたよう
な眺め。二千七八百米から上は新
雪が薄く刷かれて美事だ。五合目
としるされた地点から、ヤブ沢経
由の新道に入り、やがて喬木帯を
抜けて山頂をめざす私達の上には
秋の光がサン／＼とふりそそぎ、
やや肌さむい風が汗ばむ身には快
よい。新雪をふんで午後一時仙丈
のいただきに立つた。

訝えかえつた秋晴れ、この山頂
から見えるべき山々は、ひとつ残
らずみな見えたというより外に、
この広大無辺の展望を叙す言葉は
なからう。同行の十七才になる青
年、与瀬以遠を知らず、中部山岳
地帯の高山大岳にこの佳き日に初
見参して、感激の極みというこ
ろ。行をともにした私も、かつて
若き日初めて日本アルプスに接し
たときの昂奮を回想して、いささ
か感慨無量なるものがあつた。下
りは尾根通しの道を、満ち足りた
心をいだいて小屋に戻つた。その
夜の夢がまだかだつたのはいうま
でもない。

翌日も快晴、仙水峠から駒を越
えて五合目小屋まで、終日遠い近
い展望をたのしんだ。そして最後
の日山を去るのが惜しまれる好
日。竹宗、白須、並崎と酣むる秋

色、駒ヶ岳が私達を見送っていた。この山行、誘蛾灯のような役目をする連休を選けたのが当って、山小屋や山で二三の登山者に出会ったばかり、ことに山頂のひとときは仙丈も駒も私達だけで、静かに展望をたのしめたのは幸いであつた。ただいづれの頂上も空街の散乱集積しているのには唖然とした。都会近くの遊山地とは言えない仙丈甲斐駒の絶頂まで登ってくるのは、山の好きな人々であらう。しかしこの醜状をみて不潔不快とは感じないで、空街のいくつかを、更らに殖やして立去る登山者が多いということは、どう解釈すればよいのか。それが日本人の習性なのだと、あきらめ片付けてしまつてよいものだろうか。

この山旅で出会つた人達の全部が、米軍放たただか下げだかの寝袋を携行しているのをみて、敗戦の余慶？が妙なところに現われたものだ、つくづく感じたことだ。

樹林の多い山は色彩的に秋がいちばん壮麗である。その美しい秋に、山らしい山の味をおぼえた同行の若者が、これからどんな道を歩いてゆくか私は大きな期待をもつてそれを眺めていたいと思う。

会務報告

十月役員総会 十七日(水)

▽場所 本会図書室

▽出席者 理事小原、折井、徳久、松丸、山崎、評議員渡辺、望月、成瀬、監事諸岡、石原

▽議事および報告

一、山岳五十一年の件、原稿はす

でに工場にまわつており、広告を至急まとめ年内に発行する

一、国体の件

一、山日記および会員名簿の件

一、年次晩餐会の件、十一月末に開く予定

一、月例会計報告

十一月役員総会 十三日(水)

▽場所 本会図書室

▽出席者 別宮会長、日高副会長、理事 小原、折井、辰沼、金坂、田島、大塚、徳久、野田、石坂、部長、監事 望月、三井山梨支部長、監事 石原、諸岡

▽議事並びに報告

一、年次晩餐会の件

恒例に依る年次晩餐会を十二月二日(月)、協和会館にて開催決定

二、山岳五十一年、五十二年出版の件、五十一年は既に三校まで出ているので年内には間違ひなく出版出来る。なお五十二年も原稿は依頼済みであり、年度内に出版したい。(望月)

三、第十二回国体登山の件、別項同報告を参照、なお高校生の参加については、次回より、別枠を考慮するように検討したい。

四、全岳連の件、全岳連武田会長より十月二十日に、全岳連の日体協加盟についての申入れがあつたが、日体協へ二つの山岳団体が加盟することは出来ないことが、先般明確になつた(別宮)

五、海外登山審議委員会開催の件

十一月七日(木)第一回の会合を持つた。昭和三十三年度の外貨予算を日体協に提出することにする。

六、英国山岳会百年祭の件、十一月六日ロンドンにおける英国山岳会百年祭に壇名譽会員、松方副会長が出席された。なお横氏は現在瑞西に滞在中のことと思ふ。(日高)

七、会員名簿発行の件

会員名簿の整理は殆んど終了したので近く、発行し度いが、再三の督促にもかかわらず未納会員の整理に行悩んでいる(太田)

海外登山研究委員会発足

海外登山審議委員会の発足と同時に、本部の指導、研究部門に新たに標記の委員会を設けた。

説明するまでもなく、過去のヒマラヤ委員会を更に強化し、恒久的な研究部門とすることで左記の委員に御願した。

委員長 辰沼広吉、装備 大塚博美(マナスル装備の研究を基にし引続き行ふ)、食糧 石坂昭二郎(マナスル食糧の研究を基にする)、医療 辰沼広吉(学生部を通じ、学生登山団体の身体検査を体協医事部と協力して行ふ。またマナスル医療の研究を基にして引続き行ふ)、気象 大井正一(気象台職員)調査 松田雄一(海外登山に関する調査)通信 村木潤次郎(マナスル携行の無線を活用し、これに基づいて研究を行ふ)。

バタゴニア遠征隊壮行会 神戸
 大学バタゴニア遠征隊壮行会は十月二十四日午後六時から三井本館広間で行われ高本、円満字両隊員をかこみ、本会から日高副会長をはじめ横、三田、田辺、交野、望月、小原、折井、成瀬、辰沼、千谷、石坂、土田、松田、松丸、山崎、加藤数氏が出席しその壮途を祝した。

なお十一月一日空路アルパインクラブ百年祭に出席する横名誉会員の送別もかねて行われた。

テープレコーダー使用規定
 このほど本会ではテープ・レコーダーを購入、次の規定により会員諸氏の使用の便をはかります。
 一、この器械は本会の備品であるからお互に大切に使用下さい。
 二、会員の使用について制限しません。ただしルームよりの出ししは原則として認めませんが、役員の承認する場合はこの限りではありません。
 三、使用料は一日金百円也前納しして下さい。
 四、使用管理責任は紹介役員と借



HOSONO
TOKYO

NYLON TENT
SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

用者の附帯とし破損その他はすべて実費を弁償して頂きます。
 寄贈 マナスル登山スライド一組毎日新聞社より寄贈された。
編集後記 十二月の富士山頂に数日間滞在し、冬山の厳しさを存分に味わって来た。本号校了と前後したので若干発行が遅れたことをおわび申上げる次第。(山崎)

昭和三十三年十二月廿五日発行
 東京都千代田区
 神田駿河台四ノ六
 発行所 社団法人 日本山岳会
 編集者 山崎安治
 頒価二十円 電話神田25八九五番
 振替口座東京四八二九番
 印刷所 株式会社 技報堂

たかはら
 名人気質の店
 本店、四谷、大蔵省横入
 TEL. (03) 1912
 支店 八重州口第2鉄鋼ビル前
 TEL (07) 1560

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止
 あらゆる点で NO 1
 合資会社 代表 平林三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8~3740
 TEL (76) 5882

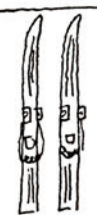


山男靴屋
 注文急製作
 登山靴
 スキー靴
 ハイク靴
 カタログ送付
 体験二〇年

PRICELIST進呈



登山とスキー具
イスタ
 東京 中央区日本橋江戸橋17 TEL (27) 7686

秀	山	月士
		
	Ski と 山 の 用具	

プ ラ イ ス ・ リ ス ト 進 呈
 電話 東京 (28) 8456
 中央区八重洲4ノ1
 東京駅・八重州口ヤンマービル横丁